

## 61 『大正新脩大藏經』の仏教教典にみる「看護」の文字の使用

—中華電子仏典協会の電子テキストから—

平尾真智子

東京慈恵会医科大学医学部看護学科

「看病」ではなく「看護」の文字は江戸後期から医学書、歴史書において使用されている。看護と仏教の関係では、鎌倉時代の虎関師錬の仏教史書『元亨釈書』（1322）に「看護」の文字が使用されているのが、現時点では一番早い使用とされている。それでは仏教経典のなかに「看護」の文字の使用はあるのだろうか。日本は6世紀から仏教が伝来しているが「看護」の文字は仏教経典にどのように使用されているのか明らかにすることで、仏教と看護の関係を考察する。

研究方法として、中華電子仏典協会（CBETA）による『大正新脩大藏經』の電子テキストから「看護」の文字を使用している経典を検索し、その経典のなかでの「看護」の使用箇所を明らかにする。

『大正新脩大藏經』は漢訳仏典の最高峰と呼ばれ、正藏（中国所伝）五十五卷、続藏（日本撰述）三十卷、別卷（図像部十二卷、昭和法宝総目録三卷）の全百卷からなっている。台北の中華電子仏典協会が電子テキスト化を推進しており、2007年2月に大藏經と卍新纂続藏經の電子化が完成し、その使用が開放されている。底本は高麗本のみである。この中華電子仏典協会による『大正新脩大藏經』の電子テキストで「看護」の文字を検索した結果、『大正新脩大藏經』の第二十冊『不空罽索神變真言經』と第五十四冊『一切經音義』の2つの経典が該当した。

このうち『不空罽索神變真言經』は真言系統の経典で、全部で三十卷ある。内容は不空罽索観音の真言陀羅尼、念誦法、曼荼羅、功德等を説くもので七十八品よりなっている。本經は十一面觀世音神呪經に基づいてこれに金剛頂經、金剛頂經瑜伽中略出念誦經、大品般若經をもって増廣したものである。そのうちの第二十一卷に「冥住現住看護是人」の一文があり「看護」が使用されている。

『一切經音義』はさまざまな経典を集めたもので、経典名ではない。ここに収められている『説無垢称經』という全六卷の経典の第一卷のなかに「看護」の文字がみられる。それは「此云女昔常守衛看護此林也」という文章である。『説無垢称經』は『維摩經』の異訳である。『維摩經』の漢訳には七訳あり、そのなかの玄奘法師が訳したものがあり、それが『説無垢称經』である。漢訳の精確さでは玄奘訳がもっともすぐれているとされている。したがって『説無垢称經』の内容は『維摩經』と同意である。『維摩經』は初期大乘経典の代表作のひとつで、維摩詰（維摩詰は音写、無垢称などと訳される）という在家の主人公が大乘思想の核心を説きつつ、出家の仏弟子や菩薩たちを次々と論破していく様子が文学性豊かに描かれている。思想的には般若空觀を承けており、大乘菩薩道の実践を説く経典である。もっとも流布しているのは鳩摩羅什の訳であるが、呉の支謙や玄奘の訳があり、「看護」の文字は玄奘法師が訳された『説無垢称經』のなかで用いられている。

電子テキストでは他に看護の文字が使用されているものとして『卍新纂続藏經』第六十二冊の『浄土極限録』や七八冊『天聖廣燈録』が検索されるが、これらは経典ではないので、今回は除外した。

これまで仏教経典と看病については『四分律』、『十誦律』、『摩訶僧祇律』などが取り上げられてきたが、これらの経典のなかに看護という文字は使用されてはいなかった。本研究により、「看護」は仏教経典の中に「看病」とは別に使用されていることが明確となった。

本研究における中華電子仏典協会による『大正新脩大藏經』の電子テキストの「看護」の検索には茨城大学の真柳誠先生、仏典の内容に関しては大正大学の佐藤雅彦先生にご協力いただいた。